

社会学的観点から検討する社会調査のインクルージョン

—文教施設における Research Inclusion Assistant フィールドトリップから—

松 崎 良 美
柴 田 邦 臣

1. はじめに

現前たる社会が、果たして第三者にとっても自分と同じように現実として了解されているのか——何が社会的事実として共有されうるものなのかといった問いは社会学がディスシプリンとして確立して以降、ずっと問われてきた問題意識であったという(出口 2017)。「私」という視点から見る社会と、「あなた」という視点から見る社会には、確かに共通している社会的事実もあるだろうが、その見え方や切り出され方は多様であるという可能性を、社会調査を実践していくうえでどのように考慮していくことができるだろうか。

Giddens and Sutton (2021) は、社会学的に考えることとは、想像力を養成していくものだとしている。ここでいう想像力とは、Mills, C. W. (1959=2017) が指摘する社会学的想像力を受けて論じられたものであるが、Giddens は、「自分の置かれた個人的状況の直接性から自由に離脱して、ものごとをもっと広い脈絡のなかでとらえられる」ことを社会学に取り組む者に求めている。これは、個々人が社会的文脈や社会構造から影響を受ける側面を持ちながらも、その行動のすべてが社会に規定されるわけではないこと、そして、個々人が備え持つ各々の個性が確かにありえることを意味し、「社会が私たちにそうさせることがらと、私たちが自分自身をそうさせることがらとの結びつきについて究明する」ことに意義を見いだすものでもある(Giddens and Suttons 2021, Prasad 2005)。

以上のような発想は、ある種、社会を定型的・類型的に把握していくことの不可能性／不測性の議論——社会を完全に客観的な対象として捉え、論じていくことに限界があるという指摘から獲得されてきたような視角でもある（Giddens 1984 = 2015）。1960年代から70年代における時代的要請の大きな影響を受けて（野家 2015, 大澤 2019）、社会的現実の捉え方もドラスティックに展開・発展し、「当惑するほど多様な相対立する理論的視座」が生まれたことを Giddens (1984=2015) は指摘している。

ただし、ある特性／属性を持つものにとっての“真実”が他者にとっての“真実”と対立するような相対主義的な論争が安易に引き起こされてしまうような、ポスト・トゥルース的な現状を批判的に捉える「新しい実在論」などの議論も生み出されてきている（千葉 & 松本 2019, 百木 2019, 浅沼 2019）。「いかなる構築主義もそれ自身、絶対的事実なしに成立しえない」——社会がある意味、相対主義的に理解される側面を持つにせよ、共有して議論しうる土壌としての「事実」はありえ、その前提のうえで議論を重ねていくことの重要性もまた、見直されてきている途上にあるといえよう（浅沼 2019）。

ポスト・トゥルース的な「真実」の乱立という状況とともに、今日ではビッグデータから提示される「真実」の擬制性を指摘する議論もみられる（柴田 2019）。集積されたデータから統計的に傾向や特徴が把握され、そのうえで提示される「真実」をそのまま「真実」と捉えてしまうことを「真理のバイパス」と柴田（2019）は表現しているが、そこで用いられる「情報」や「データ」そのものには調査主体の意志や主観が立ち入る猶予は恐らくない。ところが「真理のバイパス」を通じて得られた「真実」をそのまま社会的事実として歓迎することもまたしがたい。なぜならそれが、調査主体自身が論理的に設計したプロセスの中で獲得された「データ」や「情報」に基づく、いわば、なぜそれが「真実」となりうるのか、その原理が誰にも了解されない、ブラックボックス的に処理されてしまうような擬制的な「真実」の域を脱しえないからだ（柴田 2019）。

Giddens (2021) や Mills (1959=2017) が指摘する「社会学的想像力」は、社会と個人が双方向的に作用し合って、社会的現実を構成していくことを認識し、その構成のされ方を自覚的に捉えることで、多様な観点や視点を通じて社会を多層的・複層的に描き直していくことを目指したものともみなせよう。社会的現実を多様に切り出していくことを通じて、社会への理解や解釈を立体的に深めていくことに意義や意味を見出したものと理解できる。

確かにある事実としての「共通世界」に依りながら（Arendt 1958, 百木

2019)、私たちが帰属する「社会」というもののありようを多様な観点から切り出し、描いていくために、多様な属性やバックグラウンドを持つひとりひとりの調査主体が、その自身のありように自覚的になりながら社会を理解しようと試みていくこと——このことがまさに、現代における社会調査実践に求められている立場だとみなせる。つまり、どのような存在が、どのような文脈で、どのような立ち位置から社会を「観る」か、ということそのものの持つ豊かさが、帰属する社会をより立体的に理解するための欠かせない要素になっていく。それだけ多様な調査主体——社会をある視角を以て「観る」存在——が歓迎されることになるだろう。

この文脈において、松崎ら(2021)は、特に障害のある調査者の社会調査実践に着目し、障害のある調査者が社会調査を実施する際、同行する可能性のあるアシスタント役にはどのような配慮が求められ、その立ち振る舞いにどのような注意が求められることになるのか——その社会調査実践に「支援者」として参画する存在が払うべき留意点にはどのような点か、その整理を試みてきた。

そもそも社会調査およびフィールドワークの実践の場面で、調査者がどのように現場に関わるかということによって、現場も影響を受ける。調査者は、自らの現場への関わり方を自覚しながら、その相互作用性を踏まえながら現場における社会的事実・社会的事実を解釈していくことになる。そこで、「社会的現実」として構成される客観的事実はどのように立ち現れてくるのだろうか。それは、切り出して提示できるような種の「情報」や「データ」といえるのだろうか。

本稿では特に、調査者が調査地において求める「情報」や「データ」とは具体的にどのようなものであるのか、改めて整理した上で、その「情報」や「データ」がどのようにアシスタント役によって扱われ得るのか、アシスタント役が適切に「情報」や「データ」を伝え、取り扱うために、どのような条件が求められるのか考察していく。

2. 調査における「情報」や「データ」

社会調査における「情報」や「データ」は、調査者が、各々の問題関心や仮説設定に則って論を進める際に具体的な素材として扱われていくものだ。仮説論証のために必要な素材であり、社会調査を通じて取得される。研究は、社会調査を通じて得られた「情報」や「データ」を基に解釈・考察され、論じ

られていく。

どのような問いをたて、どのように論じていくか次第で、必要になる「情報」や「データ」の種類や性質は変化し、求める「情報」や「データ」次第で、採るべき調査方法も変わってくる。つまり、どのような場面で「相互作用性」を意識／考慮する必要性が出てくるのかについても変わりうる。

量的調査——いわゆる質問票調査などに相当する調査では、得られたデータをもとに統計学的な検討を加え分析を進め、傾向の推移や集団間の比較をすることで、問題関心を議論していくことに特化する。統計的に操作される「情報」や「データ」は、基本的には、調査対象者が紙面上あるいはオンライン上に列記された質問項目に答える形で収集される。調査者は、質問票上に記載される内容そのものやレイアウトを含むデザインなどを通じて、調査趣旨や調査目的を対象者に理解してもらう必要があり、必要な情報やデータに相当する回答を得られるよう、配慮や工夫を展開することが大前提として求められる。対象者は誤解なく、調査趣旨を理解し、求められた質問に妥当に回答する必要があるが、調査者は文字などを通じて間接的に、かつ前もって、しかも考えられうる対象者の疑問点を予測的に解消しながら準備・配慮するほかない。つまり、量的調査においては調査遂行以前の段階で、相当程度具体的に、仮説を論証していくために必要となる「情報」や「データ」の内容が絞り込まれている必要がある。どのような「情報」や「データ」が必要になるのかは、調査者本人が何をどのように論証しようと戦略を立てるか次第で変化する。そして、その「情報」や「データ」を妥当に取得することができるか否かは、調査者が丁寧に調査実施に至るまでのロジスティクス設計をすることや、質問票を構成するかに依存する (Bryman 2016)。

インタビューや観察調査に代表される質的調査で得られる「情報」や「データ」は、量的調査で取得されるようなそれとは異なり、相互作用性をより強く意識することが求められる (Flick 2018)。量的調査が概して「行動の有無」など、比較的客観性の高い「情報」や「データ」の収集に特化する一方で、質的調査を通じて求められる「情報」や「データ」においては、対象者がどのような反応を示し、どのような語り口で、どう回答するのか、といった機微そのものが含まれることも多い。インタビューにおいても、「聞き手」は無色透明な存在にはなり切れず、「聞き手」がどのような態度で話を聞き、どのような相槌を打ち、どのような質問を繰り返すか次第で、語られる内容が変わりうるのだ (桜井&西倉 2017, 岸 & 石岡 & 丸山 2016)。敢えて挑発的な質問をして、その反応そのものが、貴重な「情報」や「データ」になることもある。

ここでも、聞き手となる調査者自身が、対象者に相対して何を知りたいのか、ということが、あらかじめ意識されていることが前提として必要になるといえよう。調査者の知りたい「情報」や「データ」が具体的かつ明確に自覚されているからこそ、対象者に対して、「切り込んで」みたり、詳しく突っ込んでみたり、曖昧にしておく、などの調整を通じたデータ収集が可能になる。しかし、同時に調査者は、自分から発信した態度などを含む一連のアクションに対して、フィールドや対象者がどのような反応を返してくるのか、総体的に観察することも求められることになる。決して、対象者がどのような発言をしたかということだけではなく、どのように回答をしたか——その表情や声質、イントネーションや間、姿勢、視線なども、問題関心を解釈していくうえで重要な「情報」や「データ」になりうるためだ。つまり、対象者のどこに注目していれば、非言語的なデータを取り損ねることがないか、あらかじめ把握することが難しいということでもある。

さらに、フィールドでの観察研究といったシチュエーションに至ると、「情報」や「データ」の形態はより多様になり、かつ非限定的なものとなる。また、その場所に調査者が居合わせること自体が、その場所に流れる空気に影響を及ぼす可能性もある。ただ、調査者本人のどのようなありようが現場にどのような影響を与えるのかは、相対的な比較・判断が難しく、瞬間的に果たされる相互作用のプロセスを可視化・言語化することも難しい。何となく感じられる「ぴりとした雰囲気」や「居心地の悪さ」、「高揚する気持ち」など、必ずしも客観的とは言えないような実感も産まれ得るが、そうした主観的な印象も、問題関心を問うていく際には「情報」や「データ」として扱われることになる(小田 2010)。「情報」や「データ」として扱われるものが、あまりにも多様で一見つかみどころがないようにも思われるが、しかし、たいてい、調査者が着目する観点は、調査者その人の持つ意識的・無意識的な特性に依存している。何に注目するのか、その中で何に違和感を持つのか、は、その調査者の問題意識や前提知識などに影響を受けて決定し、かつ変化する(出口 2017)。

社会調査の「情報」や「データ」として想定されるものは、きわめて客観的に設定できるものもありえる一方で、同時的な相互作用を意識しながら、偶然性を大事に取得されていくような種類のものもある。特に、後者のような種類の「データ」や「情報」の収集に際して、障害のある調査者の社会調査を支援するアシスタント役は、どのように取り組むことができるのか。何が、「データ」や「情報」として切り出される対象となりうるか、あらかじめ設定

することが困難なものに関して、調査主体の意志や相互作用性を考慮しながら、アシスタント役がどう仲介役を担いうるのか。本稿では、調査主体が持つ世界認識と、アシスタント役のそれが重なり合う「共通世界」的基盤が存在するものとみなし、議論を進めていく。なお、ここでは、障害特性ごとに現出する社会的障壁の具体的な解消手続きなどについては敢えて言及せず、社会的事実として現前する対象を、アシスタント役が調査主体の意志に沿ってどのように「データ」や「情報」として切り出し得るのか、その可能性と課題を検討していく。

3. 実証的検討——インクルージョン・ワークショップを通じて

(1) ワークショップの位置づけ

障害のある調査者のアシスタント役は、フィールドにおいて確認・観察された事象をどのように切り出し、説明を試みようとするのか。フィールドにある客観的な事実と、アシスタント役が受けた印象を切り分けて捉えることは、調査主体の調査遂行において求められる「情報」や「データ」の収集に相当するものになりうるのか。社会調査や障害、ソーシャル・インクルージョンの議論に関心を持つ学生（2021年度に津田塾大学学芸学部で開講された社会調査法入門、ソーシャル・インクルージョン論を受講した学生）30名を対象に、「RIA (Research Inclusion Assistant) フィールドトリップ2021」というタイトルのワークショップを実施し、検討した。

ワークショップは2021年度の社会調査法入門(4)およびソーシャル・インクルージョン論の授業の年末から年始にかけ、それぞれ3回分の授業において実施した。まず問題意識の共有として、社会調査における新たな課題や展望として、障害のある調査者のアシスタントがなぜ求められているのか論点を投げかけるかたちで講義を行い、そのうえでワークショップの一環として課題を出題した。課題は、冬期休暇を利用し取り組むことができるように設定したもので、参加者の関心に基づいて近隣の文教施設を訪れ、後述する問いに回答してもらうような枠組みのもと実施した。なお、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、遠隔会議システムを用いた形態の授業運営となった中で、社会調査の質的調査実習としての側面を持つ課題でもあった。冬期休暇直前には、弱視のある視覚障害者で、フィールド調査経験を持つ当事者をゲストに招いた講演会を開催している。受講者は、障害のある調査者の社会調査を支援する、という視点を意識したうえで課題に取り組むことになっ

たといえる。年が明けてからの授業で、提出された課題に対するフィードバックを行い、総括を以て締めくくられるような形でワークショップは構成されていた。

ワークショップの一環で出題された課題では、受講者に対して3つの観点に注目して課題の回答に取り組むことを求めた。まず、「1. フィールドでの学びの設定」である。受講者がそれぞれ選択し、訪れることとなる文教施設において、訪問者が獲得可能と思われる「学び」の單元、あるいは受講者自身が獲得することのできた「学び」を言語化してもらうことを求めた。続いて、「2. フィールドで自分自身が何によって理解を深め・関心を広げたか」を整理してもらうことを求めた。実際に、1で述べられたような「学び」の実感が、フィールドにおけるどのような具体的事実によって得られたのか、なぜそのような実感を持つに至ったのか、解釈に至るプロセスを振り返ってもらうことを目指した。つまり、自身がフィールドで得た「印象」や「解釈」、「理解」が、フィールドにおけるどのような具体的な事実によって達せられたのか、整理してもらうことを通じて、「情報」や「データ」に相当するものの切り出し可能性を検証することが目指された。最後に、「3. 自身を含む見学者／訪問者に影響を与えうる展示物（情報やデータ）は多様な見学者／来場者にとってもアクセス可能か」を検討してもらった。特にどのような工夫をすることで、その情報にアクセスすることが可能になりうるかを考えてもらうことで、個々の見学者／来場者の印象に大きな影響を与える「情報」や「データ」の伝達可能性を検討した。

(2) 結果

(2)－1. 結果の概況

受講者が訪問した文教施設は北海道から長崎県まで日本全国にわたり、文教施設の種類も美術館や博物館、資料館、記念館や科学館まで幅広く及んでいた。文科省(2020)によれば、文教施設は、地域における生涯学習やスポーツ、文化の振興等を目的に設置された施設のことを示し、今回、受講者が訪れた施設の中には、市民会館や体育施設なども含まれていた。本稿では、特に、ある基本的方針に基づいて展示物を展示した、いわゆる“ミュージアム”といえるような施設を訪れて作成された回答を基に分析を実施した。

回答の中には自身がフィールドを通じて強く受けた印象ではなく、訪問先のインクルージョンやアクセシビリティに関する機能性に着目したものも複数みられた。今回は、特に受講者がフィールドを通じて受講者自身がどのよ

うな印象を持ち、理解に至ったかが明示されていて、かつ、その印象を抱くことに貢献した具体的なフィールド状況について示されたものを分析対象として扱い、10 ケースに着目した(表 1)。

表 1. 分析対象となった RIA フィールドトリップ参加者の訪問先一覧

1.	川崎市岡本太郎美術館	神奈川県	美術館
2.	三菱一号館美術館	東京都	美術館
3.	江戸東京博物館	東京都	博物館
4.	三菱一号館美術館	東京都	美術館
5.	武蔵国分寺跡資料館	東京都	資料館
6.	Bunkamura ザ・ミュージアム	東京都	美術館
7.	札幌芸術の森美術館	北海道	美術館
8.	江戸東京博物館	東京都	博物館
9.	東京都埋蔵文化財センター	東京都	歴史資料館
10.	栃木県立博物館	栃木県	博物館

今回取り上げる事例において、訪問施設は歴史的事象の紹介を軸に置くものと、芸術家の作品をあるテーマに基づいて展示するものの二系統に分けて整理することができた。単純化するならば、博物館や歴史資料館に該当するものが前者、美術館に分類されるようなものは後者に位置付けることができるだろう。対象者が訪問施設に抱く関心や目的も、その施設が取り上げている内容に則ったものとなり、かつ、得られた印象や解釈、理解のあり方もある程度、施設が意図したものと対応したものになっていることが伺われた。そもそも博物館や美術館は、展示されたり紹介されるコンテンツを無作為・適当に並べているのではなく、何らかの意図に基づいた順に並び替え、その意図が効果的に伝わるような演出も加えながら展示を行う(小森 2017)。その意味で本ワークショップの受講者たちは、文教施設側の意図を意識的・無意識的に汲み、施設側が凝らした演出や工夫を言語化するようなことが求められたともいえる。

(2)－2. 印象や理解の裏付けとなった施設における具体的事実

受講者の多くは、その文教施設が題材とするトピックスやテーマについて関心があり、その理解を深めることや、展示されているコンテンツそのものを「観る」ことに重きをおいて施設を訪れていた。「岡本太郎が表現する、平

和への祈りや戦争の悲惨さ、人間の美しさの表現を読み解きたい」、「絵画鑑賞、特に印象派の絵画に関心がある」、「江戸時代から高度経済成長期までの日本について学びたい」といった期待を持ってそれぞれの施設に足を運び、ほぼ期待していたおりの収穫を得ていたこともうかがわれた。

訪問施設の見学を通じて得られた印象や理解が何によって達せられたものであったのかについて、受講者自身は、展示作品そのものとそれに併せて示されていた解説、そしてその展示作品そのものがどのように構成されていたかを挙げて振り返っていた。

「今や絵画すらネットで調べればいくらでも画像が出てくる時代になり、作品自体の価値が下がってしまったような気もするが、やはり携帯の画面で見ると実際に自分の目で確かめるのとでは訳が違った」、「どのくらいの大きさのキャンバスにどういうタッチで、どういう筆、指を使って描いているのかを確かめることができた」、「菱垣廻船や芝居小屋や当時の人々のリアリティのある展示を行っていたこと。リアリティのある展示だけではなく、体験型の展示があったので理解を深められた」、「迫力のある大きさと重さの表記からその瓦が使われた建物を想像し、歴史を考える事ができた…中略…瓦や壺などがレプリカではなく本物であったことが心理的距離を縮めた」、「国分寺建立の詔が出された後の当時のその地の様子が模型によって復元されており、建物の並び順や距離感についても感じる事ができた」などのように、展示されているものそのものが、最も強く受講者の印象に強い影響を与え、理解や関心を深めていることが受講者自身によって分析されていた。

そうした展示に伴って、「作品も、作品のテーマごとにまとめて並べられそれぞれの作品に説明がついており、理解を深めやすい」、「エリアで絵画を時代や背景ごとに分けて展示してあった」、「絵画が10年ほどの単位で順番に展示されており、年代が変わるごとに、彼の人生や画風にどのような変化があったのか、何が影響を及ぼしたのかなど、解説するパネルが展示されていた」、「江戸時代から現代に向かうにつれて、展示室の順路が上から下へと階が下がるように続いており、最終的に出口に続くように動線が設計されていることから、展示内容と空間設計にも工夫が施されている」などのように、展示物とその展示されているものについての解説、動線を意識した展示物の構成が、受講者の理解や関心をより深めることに貢献していたことが、受講者たち自身によって意識されていた。

さらに、「入口から最初の作品までのスロープでは岡本太郎のイメージカラーである情熱的な赤で壁が塗りつぶされており、そこで一気に岡本太郎の

世界観に入り込むことができる。…中略…作品を際立たせたり世界観を強めるために、壁や床のデザインが工夫されたり、作品をより良く見せるために作品を穴から覗き見るような展示をしており、作品や岡本太郎の世界観に集中することができた」、「展示品と一緒にその商品のモチーフになっている自然の風景写真が飾られていたため想像しやすかった」、「展示会場の壁に直接、佐野(筆者注:展示された作品の作者を指している)の言葉が書かれていたり、エッセーと共に彼が撮影した写真も展示されていて、その内面について深く考えるきっかけとなった」などのように、展示作品や展示テーマが持つ世界観が展示の演出に反映され、そのことが受講者自身の印象や理解に影響を与えていたことも分析されていた。

(2)－3. 情報の伝達の可能性について

受講者は各々の関心に基づきつつ展示作品の鑑賞を通じて理解を深め、それぞれの感想を抱くこととなったが、自身が得た鑑賞経験は、多様な人たちにとっても開かれたものになっていたかどうか、どのような工夫や配慮がされている／必要とされていると考えるか、についても振り返りをしてもらった。

受講者の多くは、展示作品の展示の高さや、施設内の点字ブロックの敷設状況、音声ガイドの有無、通路の幅、解説パネルのフォントのサイズやふりがなの有無、照明の明るさや演出の配色の工夫などを挙げていた。展示された展示品そのものについての言及は、触れることができるものであったかどうか、といったことにとどまり、展示作品そのものの伝達可能性についてはほとんど触れられていなかった。

一方で、展示作品を通じてそれぞれの観覧者が感じる「雰囲気」のようなものを共有することの難しさを指摘する感想も見られた。

床や壁のデザインや空間の広さ、館内音楽などの世界観を強める「雰囲気」は視覚障害者や聴覚障害者には伝わりにくい。しかしそれを説明してもそれが伝わることは難しいと考える。例えば聴覚障害者のために、付き添う他者が「静かなクラシックが流れています。」と言っても、それは言葉にすることで世界観が逆に崩れる可能性や、想像することができず役に立たない可能性がある。「雰囲気」には限界があるのかもしれない。

上述のコメントに見られるような「雰囲気」とは、その現場に立ち会う人ひとりひとりがそれぞれ異なって抱くような、解釈のされ方が幅を持ち得る種のものとしてみなすことができる。受講者は、「言葉にすることで世界観

が逆に崩れる可能性や、想像することができずに役に立たない可能性がある」としており、自身にとって強い印象を与えるきっかけとなった客観的情報として知覚されている、そこで見えるもの・聞こえるものについて言語化することが躊躇われていた側面が伺われた。

(3) 考察

(3)－1. 問題意識や関心に基づく“客観的情報”

社会調査における「情報」や「データ」を分かりやすく切り出し、伝達可能性を検討する場として今回のワークショップでは、文教施設——博物館や美術館という場所への訪問を受講者に促し、自身の鑑賞体験に基づいて、鑑賞をかたちづくる社会的事実を整理してもらうことを試みた。受講者の多くは自身が抱いた印象や理解が、何によって構成されていたかをよく理解していた。展示作品そのものであったり、展示の構成、解説、展示上の演出などが挙げられており、自身の理解や感想に至らしめた「情報」や「データ」を切り出して整理することができていた。

しかし、フィールドにおける対象そのものへのアクセスの方法が具体的に語られることはなかった。該当施設における移動のしやすさや、当該施設が配慮している情報のアクセシビリティの実際を述べることにとどまった。むしろ、自分の説明が第三者の世界観の構築を邪魔してしまうのではないかという観点から、「敢えて言葉にするべきではない情報」があるのではないかという判断がなされているようでもあった。

実際、今回のワークショップを通じて実践された「情報」や「データ」の切り出しは、受講者自身の関心と感想に依拠して試みられたものであった。受講者たちが切り出した「情報」や「データ」が、必ずしも、第三者にとっても、同様の効果や影響力を持つものであったかは定かではない。「言葉にすることで世界観が逆に崩れる可能性や、想像することができずに役に立たない可能性がある」ことから、言語化することに躊躇った「情報」や「データ」。これはまさに、第三者にとっても重要になりうる「情報」や「データ」であるかどうかは分からないもの——受講者自身の“前提”や“問題意識”、“関心”に依存した「情報」や「データ」であった可能性がある。受講者自身が対象と向き合う独自の目線や観点があったからこそ、切り出され得た「情報」や「データ」であった可能性だ。この《可能性》が受講者自身においても意識されており、それゆえ、その伝達必要性が躊躇されたとも理解できるのではないか。

今回のワークショップからは、フィールドにおいて「説明される客観的情

報」と、客観的に切り出すことが可能であったとしても、「敢えて言葉にするべきではないとみなされる情報」が存在したことが伺われた。特に、後者は、観察者自身の“前提”や“問題意識”、“関心”に影響を受けて切り出されたり、切り出されなかったりする可能性を持つと考えられる。いわば、調査主体の問題意識や関心がどこに設定されているか次第で、その発現性も重要度も変わってくる種の「情報」や「データ」ともいえる。その種の「情報」や「データ」について、調査を支援する立場にある者は、その要・不要の判断をつけることができない。さらに言えば、そもそもそのような何かしらの「情報」や「データ」の存在に対して気づくことができない可能性もある。

フィールドにおける「情報」や「データ」の形態がより多様・非限定的なものになることは2章でも確認してきたが、それはつまり、調査主体がどのような“問題意識”や“関心”を持つか次第で、収集される／収集されるべきとされる「情報」や「データ」も多様なバリエーションを持つことを意味する。アシスタント役にとっては、「敢えて言葉にするべきか判断に躊躇する情報」の比重が大きくなる可能性ともいえよう。であるからこそ、調査主体が調査趣旨や意図、具体的に必要な「情報」や「データ」のイメージを明確に持っていることが重要な意味を持つことになると言えるのではないだろうか。調査主体に課題が明確に自覚されていれば、「敢えて言葉にするべきではないとみなされる情報」も調査主体自身によって取捨選別が可能なものになりえ、ときには、調査主体がフィールドや対象と相互作用を進めていくうえでの手掛かりとして活かされるものにもなると言えるのではないだろうか。

以上を受けて新たに問題として指摘し得る観点は、以下の二点がまずは挙げられよう。まず、各々の主観的現実の構成に資するような「情報」や「データ」を切り出していく具体的な方法はあるのか、またその実践はどのような工夫や配慮に基づくのかという点だ。第二に、調査主体ではない第三者によって切り出された「情報」や「データ」が、どれだけ客観的事実としての信用に足るものと捉えうるのかという点だ。本稿では、主観と客観に関わるような以上の二点について掘り下げて考察を進めていく。

(3)－2. 音声ガイド制作が伝える「客観的情報」

障害者に対して、障害者自身が解釈する余地を残す情報の伝え方を実践している事例として、バリアフリー映画の制作が挙げられる。平塚(2016)は、バリアフリー映画を、「映画を鑑賞する上で様々なアクセスバリアをかかえた人たちと、共に映画を楽しむことができるよう環境を整える映画のこと」

と定義し、具体的には、字幕や手話をつけたり、セリフの合間に場面の視覚的情報を補う音声ガイドを設ける実践として、活動を進めてきたという。

「視覚障害者に心地よく映画を鑑賞してもらえるガイド」を目指すために、さまざまな留意事項が既に言語化されている。必ずしも映画の音声ガイドに限定されることではないが、例えば指示語や方向、物の説明に気を配る、表情を説明するときは主観を入れず、見えていることを客観的に表現する（「悲しそう」ではなく「目を潤ませる」といったように）など（小笠原, 2021）、主観的にとった印象を断定的に押し付けないような配慮や工夫は、その実践において重要なものとして強調して紹介されている。しかし、小笠原のインタビューによると、鑑賞者の印象につながるように思われる客観的な情報であっても、その情報提供が鑑賞の妨げになる可能性も常に配慮されながら音声ガイドが制作されていることが伺える。

「視覚障害者の方はみなさん、『映画のなかに入っている』と言いますね。主人公になったり、友人の役だったり、そばで見守っていたりすると。だから、そこから出さないでほしいと。広い映画の世界を生きているのに、言葉によってそれを小さくしないでほしいと。たとえば、急に『カメラがその上から……』とテクニカルな説明をされると、現実に戻されてしまうとか。…略」（小笠原（2021）の実施したインタビューから音声ガイド制作に携わる八木田幸恵さんの発言を抜粋）

映画の音声ガイドにおいては、映画を「鑑賞」という大きな目的があり、その「鑑賞」に足る過不足のない情報を、どのようなタイミングでどのようなスタイルで伝達していくか、思考錯誤を経ながら作り上げていくような種のものとして理解できる。より多くの障害当事者の自然な鑑賞を実現できるよう、当事者からのフィードバックも得ながら最も妥当と思われる判断の積み重ねを経て一つの映画作品の音声ガイドが完成することになる。

音声ガイドは映画だけではなくNHKをはじめとするテレビ番組などでも「解説放送」として導入されているが、ここでもやはり、どの程度の客観的情報を伝達していくかは、視聴者それぞれの好みや目的によって異なり、課題を抱えていることが指摘されている（今井 2019）。柴田ら（2016）が字幕サービスを利用する主体が、字幕付与された映像を楽しむリテラシーを育てていた可能性を指摘していたように、音声ガイド付きの映像を楽しむリテラシーに相当するものもありえるかもしれない。いずれにせよ、どのような客観的情報を、どの程度、伝達することが適当であるのか、という問題は、映画や公共放送における音声ガイド制作の現場でも存在していることが確認さ

れた。不特定多数の存在に向けて音声ガイドが制作されなければならないという実情ゆえの課題ともいえるが、それだけ「鑑賞」や「視聴」において“ちょうどよい”情報提供が多様にありえ、万能な解決策ともいえるようなものが不在であることが理解できる。音声ガイド制作の現場においては、常に作品そのものの構成や作風の理解に努め、より多くの人にとっての「自然な鑑賞」をかなえるような試行錯誤が蓄積されているのだ。そして、その工夫が少しずつ必要に応じて参照されるようなノウハウとして示されるように至っている。

(3)－3. メディアの客観的事実

現前の情報を伝達する、という役割に着目するとき、その「情報」がどれだけ客観性に裏付けられているのか、という点も、検討が必要な観点のひとつだろう。マス・コミュニケーション研究においても、マス・メディア報道が、事件・出来事の中の特定の事実に着目し、それらを取捨選択し、ニュースとして纏め上げる点で、現実を構築・構成してきた側面があったのではないかという指摘や議論が蓄積されてきた(山口 2011)。

本稿で提起してきた障害のある調査者を支援するリサーチ・インクルージョン・アシスタントという存在も、調査主体の障害特性に由来して発生する得難い「情報」や「データ」を、伝達しようとする際に、多様に立ち上がりうる“客観的情報”を取捨選択したうえで伝達することになる可能性は大きい。支援者が特有の観点から切り出す“客観的情報”もあれば、見落としてしまう“客観的情報”もありえ、同時に支援者自身に知覚されていたとしても伝達すべきか否か、判断に迷うような“客観的情報”があり得ることはワークショップを通じた実践で確認されてきた。

ただし、成田(2015)は、「マス・メディアが作り出したメディアの現実は一方向的でインタラクションができない分、社会的なリアリティの上では孤立した、いわば離れ小島のような象徴的現実であった」とし、情報の発信側と受信側の非対称性が問題点として挙げられてきたことを指摘している。人々の主観的現実が構成されていく際に、マス・メディアから伝達される情報は不可欠だが、その情報曝露は常に受け身的にならざるを得ない。だからこそ、情報の受け手が構成する主観的現実に変質が発生しえないか、という指摘が成立するのである。

マス・メディアが伝える「情報」に際して、発信側と受信側の関係が非対称的になるのは、単に物理的に応答可能な環境にない、ということだけには

依らないだろう。日々、刻々と変化する一連の報道内容に対して、特別な事情でもない限り、「情報」の受信側に立つ存在は「特別な問題意識」や「関心」を以て情報を取得しないことが多い。受信した「情報」を吟味し、取捨選別したり、「情報」が情報として切り出される以前の原型に思いを馳せることができるのは、その対象に対しての“問題意識”や“関心”があるからこそ可能になる。マス・メディアにおける発信者・受信者の関係性が一方向的にならざるを得ないのは、受信者側に常に対象となる情報の問題意識や関心を求めることができないからともいえよう。

社会調査において、フィールドや対象に対して“問題意識”や“関心”を抱くことは大前提の条件だ。そもそもこの問題意識や関心があるからこそ、社会調査が計画される。その意味では、支援者が切り出す「情報」や「データ」を調査主体は、ただただ受信するばかりの存在にはなりえない。調査主体に“問題意識”や“関心”がある限り、受け取った「情報」や「データ」に必ず応答していく、インタラクションが成立するはずだ。その意味で、アシスタント役となる支援者が、切り出す客観的情報は、調査主体の応答を経たうえで主観的現実として構成されていく一要素として成り立ちうるといえよう。

4. まとめ

障害者の社会調査実践に際して、その調査をサポートする役割を負う支援者が、調査主体が必要としている「情報」や「データ」の伝達に貢献しうるのか、そこで伝達される「情報」や「データ」が果たして信頼性における客観的事実として、調査主体の主観的現実を構成していく要素になりうるか、という点について検討を行ってきた。

社会的現実として構成されうる客観的情報は多様に切り出され得る。支援者の立場に立つ者が認識する客観的情報が、そのまま調査主体において有用なものになりうるのか、支援者側が判断することはできないし、その責任を負うこともできない。また、多様な解釈に至りうる手掛かりとして位置付けられる客観的情報の伝達に慎重にならざるを得ないことも多い。伝達された情報が、調査主体が理解を進めるうえでのノイズになりうる可能性は、音声ガイド制作などの実践でも指摘されてきた。ところが、ここでもやはり、支援者側が、自らが認識した客観的情報の要・不要を選別することは不可能だ。調査主体だけが、自身に必要となる「情報」や「データ」がどのような種のものであるかを知っているものであり、調査主体以外の存在は、事前にはそ

れを知り得ないのである。調査主体は、得られた「情報」や「データ」について、調査主体が自身の調査趣旨に基づき評価・判断し、支援者への応答として、フィードバックを返していく。そのインタラクションから、得られる「情報」や「データ」の精度を上げていくことに努めるほかない。つまり、調査主体は自らが調査を実施することの意義を自覚したうえで、自らの研究課題に取り組んでいくうえで必要な「情報」や「データ」の像を想定してフィールドや対象に相対する——いわば、調査において自ら以外の第三者との「共通世界」的な基盤が存在することを想起することが求められるといえよう。

障害のある調査者を支援するアシスタントは、自身が認識する客観的情報もまた、自身の“問題意識”や“関心”に少なからず影響を受けて立ち現れていることを自覚する必要があるともいえよう。そのうえで、客観的情報を調査主体に伝え、その応答を経ながら調査主体にとっての主観的現実の構成に貢献していく手立てを探っていく——共有する世界がありながらも、そこから立ち現れ、意識される“気づき”や“理解”の多様性を自覚する、尊重と配慮の態度が必要になるのではないか。

調査主体と支援者の間には、客観的情報の伝達をめぐるインタラクションが存在しうが、そのインタラクションの基盤となるのは、調査主体においても、支援者においても、明確に知覚される実体そのものになるだろう。社会調査における問いを調査主体がどう見だし、位置付けるかということによって、対象とする実体そのものの見方や、その対象から切り出すべき「データ」や「情報」の像が明確化されていく。

今後は実際に、どのように社会調査や社会的活動に携わる障害のある調査者たちがどのような課題を具体的に抱え、対処の経験を蓄積してきたのか、ということを実証的に問いながら、社会学をめぐる理論的枠組みの整理をしながら改めて位置付けることが課題となるだろう。

本研究は、2020年度科学研究費補助金（若手研究）20K13703「社会調査におけるリサーチ・インクルージョン・アシスタントの可視化と可能性」、(基盤研究C) 20K12550「EdTechの次へ：本質的学びのためのICTとインクルーシブ教育のプラットフォーム」の助成を受けて実施しました。

参考文献

- 浅沼光樹 (2019) 「新しい実在論」『現代思想 43 のキーワード』47 (6), 33-37.
- Alan Bryman (2016) *Social Research Methods*, Oxford University Press.
- Anthony Giddens (1984) *The Constitution of Society 1st edition*, Polity Press. 門田健一訳 (2015) 『社会の構成』勁草書房.
- Anthony Giddens & Philip W. Sutton (2021) *SOCIOLOGY ninth edition*, Polity Press.
- 今井篤 (2019) 「音声でテレビを楽しむ」『NHK 技研 R&D』No.175.
<https://www.nhk.or.jp/str/publica/rd/175/2.html> 2022 年 9 月 26 日参照.
- Uwe Flick (2018) *An Introduction to Qualitative Research*, SAGE Publications Ltd.
- 大澤真幸 (2019) 『社会学史』株式会社講談社.
- 小笠原綾子 (2021) 「障害のある人の世界にふれる 『シティ・ライツ』が耕してきたバリアフリー映画鑑賞という文化①～音声ガイド制作編～」『月間ケアマネジメント』32 (3), 30-32.
- 小田博志 (2010) 『エスノグラフィー入門 〈現場〉を質的研究する』春秋社.
- 岸政彦, 石岡丈昇, 丸山里美 (2016) 『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣.
- 小森真樹 (2017) 「ミュージアム研究における「展示の政治学」論の系譜：受容論的転回と展示の詩学」『ムゼイオン』17, 1-20.
- 桜井厚, 西倉実季 (2017) 「対話的構築主義との対話 ライフストーリー研究の展望」『現代思想』Vol.45-6, 60-84.
- 柴田邦臣, 吉田仁美, 井上滋樹 (2016) 『字幕とメディアの新展開：多様な人々を包摂する福祉社会と共生のリテラシー』青弓社.
- 柴田邦臣 (2019) 『〈情弱〉の社会学——ポスト・ビッグデータ時代の生の技法』青土社.
- 千葉雅也, 松本卓也 (2019) 「〈実在〉の思想と病理」『現代思想 43 のキーワード』47 (6), 8-21.
- 出口剛司 (2017) 「『ポスト真実』における社会学理論の可能性 批判理論における理論の機能をてがかりにして」『現代思想』vol.45-6, 234-245.
- 成田康昭 (2015) 「インターネットに媒介された『現実の社会的構成』」『応用社会学研究』No.57, 47-67.
- 野家啓一 (2015) 『科学哲学への招待』筑摩書房.
- Hannah Arendt (1958) *The Human Condition*. University of Chicago Press. 志水速雄訳 (1994) 「人間の条件」筑摩書房.
- 平塚千穂子 (2016) 「映画音声ガイドの現状——ユニバーサルシアターの設立に向けて——」画像電子学会, 年次大会予行.
http://www.y-adagio.com/public/committees/vhis/ann_confs/mcc2016/T1-6.pdf 2022 年 9 月 26 日参照.
- Pushkala Prasad (2005) *CRAFTING QUALITATIVE RESEARCH Working in the Postpositivist Traditions*. Routledge. 箕浦康子監訳 (2018) 『質的研究のための理論入門 ポスト実証主義の諸系譜』ナカニシヤ出版.

松崎良美, 柴田邦臣 (2021) 「社会調査実践のプロセスから考える——インクルーシブな調査研究と社会問題探求の関連性」『総合研究』7, 1-22.

Mills, C. W., *The Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959. 伊奈正人, 中村好孝訳 (2017) 『社会学的想像力』筑摩書房.

百木漠 (2019) 「ポスト・トゥルース」『現代思想 43 のキーワード』47 (6), 100-105.

文部科学省 (2000) 「文教施設企画・防災部 未来をささえる文教施設」

https://www.mext.go.jp/content/20200218-mxt_bousai-100003970_1.pdf 2022 年 9 月 26 日参照.

山口仁 「社会的世界の中の『ジャーナリズム』——構築主義的アプローチからの一考察——」『帝京社会学』24 号, 93-117.